学会ウェブサイト：http://joha.jp　　2026 年 8 月 20 日

ＪＯＨＡニューズレター

第 50 号

日本オーラル・ヒストリー学会第 24 回大会（JOHA24）のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第 24 回大会(JOHA24)が 2026 年 10 月 3 日（土)・4 日(日)に、松山大学(10 月 3 日)と子規記念博物館（10 月 4 日）にて開催されます。10 月 2 日(金)にはエクスカーションが実施されます。ふるってご参加ください。

【目次】

Ⅰ．日本オーラル･ヒストリー学会　第 24 回大会
会長・開催校挨拶　・・・2
1. 大会プログラム　・・・5
2. 自由報告要旨　・・・11
3. 大会記念シンポジウム「地域女性史のいまーここに生き　ここを変える」・・・21

Ⅱ．第 12 期理事会報告・・・・・・・・・・22
第 1 回臨時理事会（2026 年 5 月 20 日）
第 3 回理事会(6 月 21 日)
第 2 回臨時理事会(7 月 29 日)

Ⅲ．シンポジウム・ワークショップ報告
作品と現地を結ぶ（神戸・長田）・・・27

Ⅳ.お知らせ　・・・29
1．2026 年度会費納入のお願い
2．会員異動

＊ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

Ⅰ．日本オーラル・ヒストリー学会　第 24 回大会

Japan Oral History Association 24th Annual Conference

《会長挨拶》

厳しい暑さが続いておりますが、会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。日頃より JOHA の活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

今年度の大会は、10 月 3 日（土）・4 日（日）に愛媛県松山市にて開催いたします。松山での開催は 2011 年以来、2 度目となります。2 日（金）のエクスカーションをはじめ、大会記念シンポジウム、展示、懇親会など、地元の方々の多大なご協力を得て、様々な企画を用意しています。大会そのものをフィールドワークとして楽しみ、「ご当地」を味わっていただければ幸いです。

今回の会場は、初日を松山大学、2 日目を子規記念博物館といたしました。JOHA には在野で活躍される方々も数多く参加されています。かねてよりオーラル・ヒストリーならびに学問とは、大学だけに閉じ込められるものではないと感じてきました。今回の会場選びにはそうした思いも込めています。

また、大会記念シンポジウムのテーマは「地域女性史」です。松山で 1950 年代半ばに他の地域に先駆けて女性史サークルが始まったことを知って以来、いつか企画を実現させたいと思っていました。地域女性史は JOHA にとっても大変重要なものであり、念願が叶ったことを嬉しく思いっています。

実りある大会となりますよう、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

会長　石川良子

《開催校挨拶》

このたび石川良子会長の下で、2011 年の第 9 回松山大会に引き続いて、もう一度、愛媛県松山市において JOHA 大会を開催できること、とても幸運なことです。地方開催なので、自由報告のエントリー数を気にかけていましたが、蓋を開けて見れば、30 のエントリーがあり、昨年の大会に匹敵するような参加者が期待できます。今大会も、みなさんのますますの交流と研究に貢献できる機会になるよう努めたいと思います。前回の大会は、四国遍路を大会記念シンポジウムとしましたが、今年は日本における地域女性史の草分けとも言える愛媛県の女性史サークルの方々と協力して、「地域女性史のいまーここに生き　ここを変えるー」を一般市民公開のシンポジウムとすることができました。大会準備は、理事の私と石川会長、そして松山大学人文学部社会学科の河村裕樹さんと緊密な連携を取りながら、松山大学生協の大きな支援も得て進めてきました。今回の大会の大きな特徴は、松山大学樋又キャンパスにおいて行うだけでなく、みなさまに松山市、特に道後温泉の街の雰囲気を味わってもらうために、道後公園内にある正岡子規記念博物館を大会会場としました。2 日目の子規博のお昼休みは、ぜひ道後温泉を散策してください。この他にも、三津浜のブルワリー麦酒伝のクラフトビールを懇親会で提供できるだけでなく、1 日目は来年で創立 100 年となる松山大学生協の歴史的資料の展示を樋又キャンパス 1 階において行い、子規博の 1 階ロビーにおいては、

牧瀬茜さんの写真（ストリップ・踊り子）を大会期間中に展示しています。エクスカーションでは、2 つのコースを準備しました。ひとつは、松山から外の世界への玄関口であった三津浜を旧鈴木亭を中心に散策します。もうひとつは、四国に唯一の四国朝鮮学校です。ぜひ四国朝鮮学校の歴史と現在を知ってほしいと思います。10 月 3 日の大会 1 日目の懇親会は松山大学樋又キャンパスに地元グルメをそろえてお待ちしておりますが、大会前日 10 月 2 日の懇親会は、四国朝鮮学校と関わりの深い焼肉屋である JR 松山駅そばの国際亭で開催します。エクスカーションに参加できない方で、前日に松山に到着した方も、ぜひご参加ください。前回の松山大会よりもディープな松山をお楽しみいただけると思います。

宿泊先については、他の観光地と変わらず、インバウンド客が多いので、早めに宿を確保してください。道後温泉だけでなく、伊予鉄道の大街道あるいは市駅といった松山市内であれば、どちらの会場へのアクセスも比較的良いと思います。昼食については、1 日目の松山大学樋又キャンパスには懇親会で使う 1 階の生協食堂ル・ルパがあり、近くにコンビニや食堂があります。2 日目は道後温泉での開催になるので、近隣のコンビニ、あるいは道後温泉での昼食をおすすめします。Wi-fi は Eduroam とえひめ Free Wi-Fi が松山大学樋又キャンパスにて、子規博では、えひめ Free Wi-Fi が利用できます。それでは、会場で皆さまとお会いできることを、楽しみにしています。

開催校理事　山田富秋

開催日：2026 年 10 月 2 日（金）・3 日（土）・4 日（日）
　　2 日（金）はエクスカーション
※1 日目と 2 日目の会場が違います。ご注意ください。
会場（1 日目）：松山大学樋又キャンパス 2 階　松山市道後樋又 6－3　https://www.matsuyama-u.ac.jp/guide/campus/guide-206304/
会場（2 日目）：子規記念博物館　松山市道後公園 1－30　https://shiki-museum.com/
主催：日本オーラル・ヒストリー学会

１．参加申込について
＜エクスカーション＞
日　時：2026 年 10 月 2 日（金）　13：30～16：30
参加費：3000 円（両コース共通）
【コース①】三津浜探訪　歴史的スポットの散策　（定員 10 名、先着順）
【コース②】四国朝鮮学校訪問　見学＆レクチャー　（定員 15 名、先着順）

大会前日懇親会：18：00～
会　場：国際亭（四国朝鮮学校と関わりの深い焼肉屋　松山市宮田町 391－1　JR 松山駅そば）
参加費：5000 円（定員 30 名、先着順）
参加費の支払い方法： Peatix にて事前にチケットをご購入ください。
購入ページ： https://joha2026excursion.peatix.com
購入期限：2026 年 10 月 1 日（木）18：00（コンビニ・ATM での支払いは 9 月 30 日まで）

（定員に達し次第、販売を終了します。）

＜大会＞
開催方法：対面のみ
参加費：一般 2000 円、学生その他 1000 円
※「その他」には年収 200 万円以下の方が該当します。
参加費の支払い方法： Peatix にて事前にチケットをご購入ください。

購入ページ： https://joha2026matsuyama.peatix.com
購入期限：2026 年 10 月 1 日（木）23：59（コンビニ・ATM での支払いは 9 月 30 日まで）

大会 1 日目の懇親会費は下記の通り、現地にて現金で徴収します。
＜注意事項＞
・支払いには以下の決済方法をお使いいただけます。
クレジットカード（VISA、MasterCard、JCB、AMEX、Discover、Diners Club）
コンビニ（Lawson、FamilyMart、Ministop、Daily Yamazaki、Seicomart、手数料 220 円は購入者負担）
ATM（Pay-easy、ゆうちょ銀行、ジャパンネット銀行、楽天銀行、じぶん銀行）
・会場受付にてチケット（スマホ画面または印刷したもの）をスタッフにご提示ください。
・領収書は原則発行いたしません。利用明細書・引き落とし明細書・コンビニ発行の領収書・peatix 発行の領収データなどを領収書の代替としてご利用ください。
・当日大会会場での受付はできませんのでご注意ください。

＜自由報告・テーマセッション報告者へのお願い＞
◎自由報告へのお願い
1）自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分（合計 30 分）で構成されています。
2）報告者へのお願い：報告資料は 9 月 25 日（金）までに下記のフォームからお送りいただければ、大会参加者のみが閲覧できるようにします。
https://forms.gle/j5yzJ9oodVHMc2UA8
事前にお送りいただいた方が会場配布資料を作成するかどうかは任意です。事前送付が間に合わない場合、オンラインでの共有を望まない場合は、50 部の印刷をお願いします。なお、会場にコピー機はありません。

◎テーマセッションへのお願い
1）テーマセッションは 150 分です。時間の範囲内で、報告・コメント・討論を行ってください。
2）報告資料のお願い：報告資料は 9 月 25 日（金）までに下記のフォームからお送りいただければ、大会参加者のみが閲覧できるようにします。
https://forms.gle/j5yzJ9oodVHMc2UA8

事前にお送りいただいた方が会場配布資料を作成するかどうかは任意です。事前送付が間に合わない場合、オンラインでの共有を望まない場合は、50 部の印刷をお願いします。なお、会場にコピー機はありません。

２．大会プログラム

◆10 月 2 日（金）13:30～16:30　　大会前日エクスカーション

JOHA 松山大会では、大会前日のエクスカーションを 2 つ設けました。ふるってご参加ください。

①三津浜探訪：江戸時代から松山の玄関口として栄えた港町を歩く。古建築に魅せられ、自ら購入・改装した旧鈴木邸でカフェと暮らしを営んでいる方を案内人に、三津の歴史と風情を味わう。

定員 10 名　参加費　3,000 円

②四国朝鮮学校訪問：愛媛大学教育学部の魁生由美子氏を案内人として、四国朝鮮学校の歴史と現在についてレクチャーを受ける。授業参観も行う。

定員 15 名　参加費　3,000 円

大会前日懇親会　10 月 2 日（金）18:00～エクスカーション及び前日から来松者の懇親会

会場：国際亭（四国朝鮮学校と関わりの深い焼肉屋）　松山市宮田町 391－1　JR 松山駅そば

定員 30 名　参加費　5,000 円

大会懇親会　10 月 3 日（土）18:00～

会場：松山大学樋又キャンパス 1 階食堂ル・ルパ

定員　80 名程度　参加費　一般　5,000 円　学生その他　2,500 円

※大会当日の懇親会参加申込は Peatix にて回答してください。ただし、当日その場での参加も可能です。参加費は現地にて現金で徴収します。なるべく、おつりの出ないよう、参加費を準備してください。

※懇親会の余興として、地元のミュージシャンが出演します。また、愛媛の地酒やじゃこ天などを用意して、松山での開催にふさわしいメニューを準備しています。

※エクスカーション、大会前日懇親会、大会は、事前に Peatix にて参加費をお支払いください。

※宿泊情報　道後温泉には多くのホテルがあります。しかし、インバウンド客で混むことが予想されますので、市内（伊予鉄大街道駅または市駅周辺）のホテルも探してみてください。交通アクセスは比較的良好です。

※昼食情報　1 日目（10 月 3 日）の松山大学樋又キャンパスでは、懇親会場の 1 階食堂ル・ルパが営業中です。近隣にコンビニ、定食屋、ラーメン屋、コメダコーヒーなどがあります。2 日目は道後温泉周辺で各自昼食を取ってください。道後温泉駅前にコンビニがあります。

◆10 月 3 日（土）展示

会場：松山大学樋又キャンパス 1 階ソーシャルコモンズ　松山大学生協 100 周年記念展示

来年で創立 100 年となる松山大学生協の歴史について関連資料の展示を行います。

◆10 月 3 日（土)、10 月 4 日（日）　展示

会場：子規記念博物館 1 階ロビー 牧瀬茜さん（ストリップ・踊り子）による展示

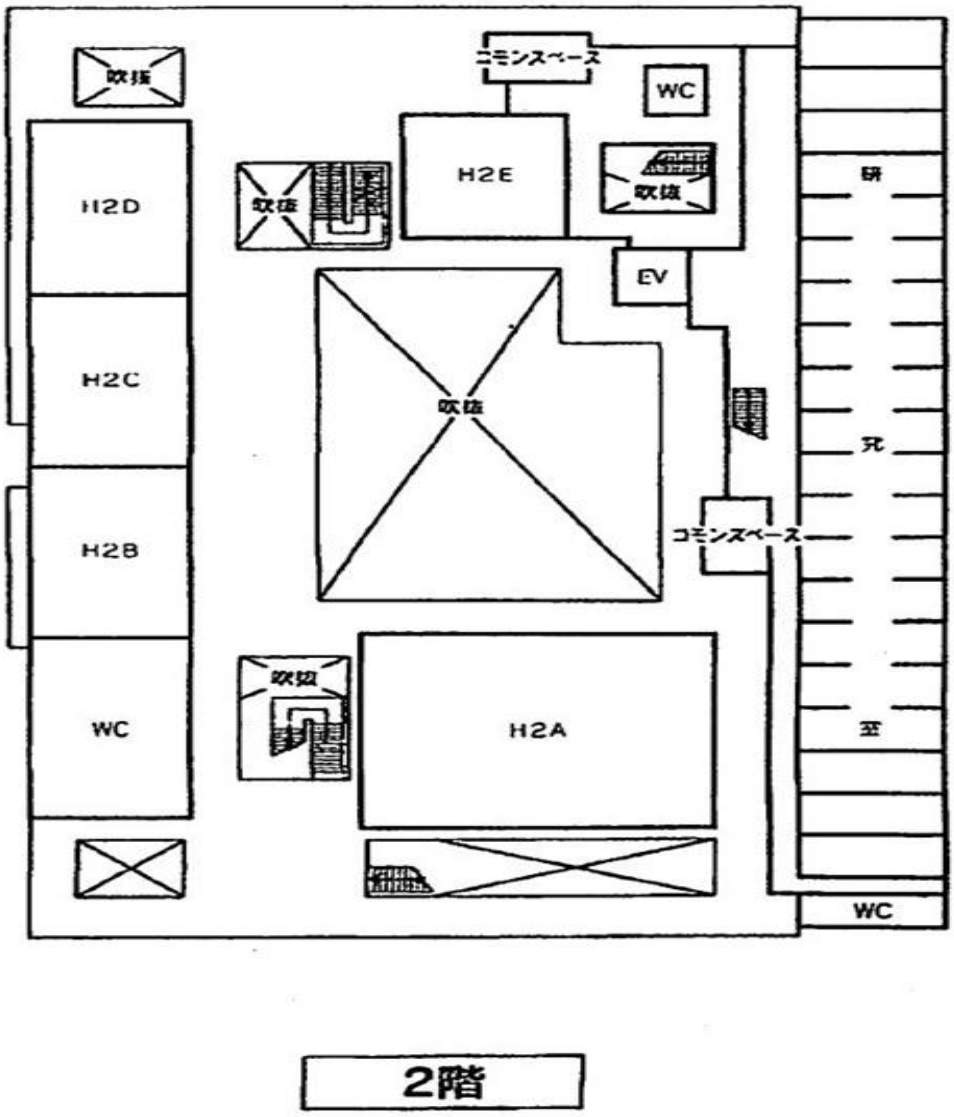
牧瀬茜さんは踊り子として長いキャリアをもち、道後のストリップ劇場にも数多く出演してきました。本大会では、牧瀬さんが聞き取りや写真撮影によって記録してきた、ストリップの世界に生きる人たちの姿をご展示いただきます。

◆10 月 3 日（土)、10 月 4 日（日）　大会

※1 日目と 2 日目の会場が違います。注意してください。

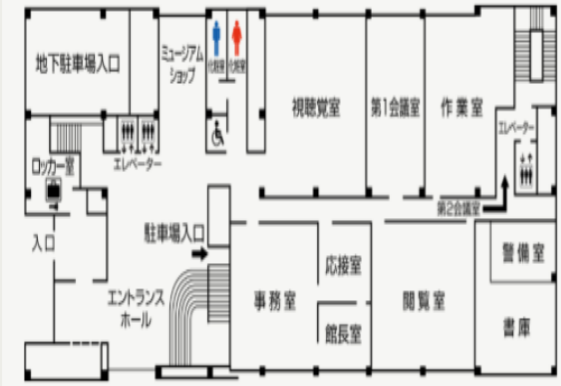
大会 1 日目

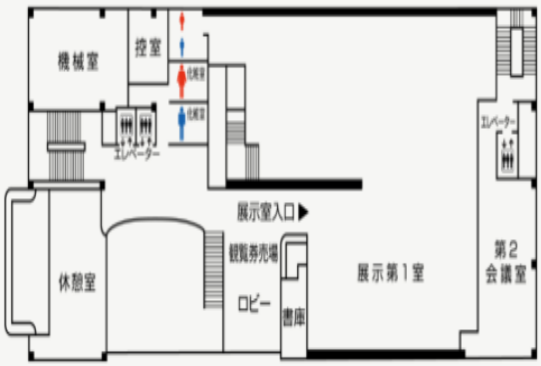
松山大学樋又キャンパス 2 階案内図

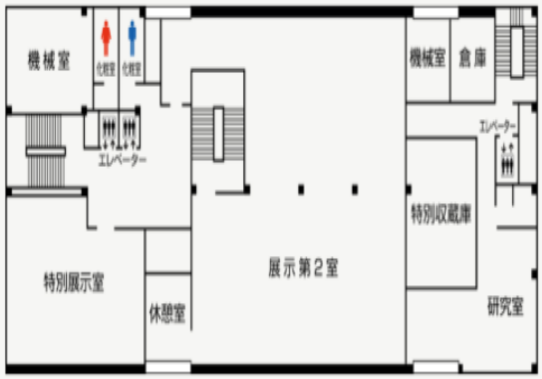


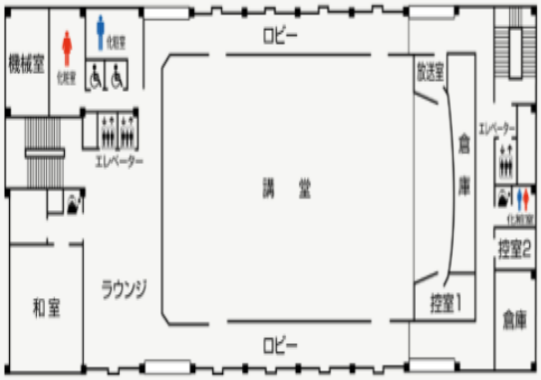
<table>
<tr><th colspan="4">大会1日目　2026/10/3（土）</th></tr>
<tr><td>10:00-
10:30</td><td colspan="3">開会あいさつ（会長）・日程説明（研活）（安岡健一）
→ 各会場移動</td></tr>
<tr><td></td><td>会場１（H2A）</td><td>会場２（H2B）</td><td>会場３（H2C）</td></tr>
<tr><td>10:30-
11:00</td><td>①木川剛志</td><td>⑤田野倉和子</td><td>⑫金汝卿</td></tr>
<tr><td>11:00-
11:30</td><td>②松原かおり</td><td>⑥林貴哉</td><td>⑬木村豊</td></tr>
<tr><td>11:30-
12:00</td><td>③吉成・三好</td><td>⑦大森優美</td><td>⑭大森貴弘</td></tr>
<tr><td>12:00-
13:30</td><td colspan="3">昼休み（H2Eにて理事会）</td></tr>
<tr><td>13:30-
14:00</td><td rowspan="5">④テーマセッション
（150分）山本恵里子</td><td>⑧港那央</td><td>⑮千葉直美</td></tr>
<tr><td>14:00-
14:30</td><td>⑨亀井恭祐</td><td>⑯吉田暁生</td></tr>
<tr><td>14:30-
15:00</td><td>⑩森谷理沙</td><td>⑰大池・武輪・髙井</td></tr>
<tr><td>15:00-
15:30</td><td rowspan="2">⑪研活WS</td><td></td></tr>
<tr><td>15:30-
16:00</td><td></td></tr>
<tr><td>16:00-
16:10</td><td colspan="3">（休憩）</td></tr>
<tr><td>16:10-
17:40</td><td colspan="3">総会</td></tr>
<tr><td>18:00-
20:00</td><td colspan="3">樋又キャンパス1階食堂ル・ルパで懇親会</td></tr>
</table>

大会２日目
子規博館内図　左上から１階→右上２階→左下３階→左上４階









大会2日目　2026/10/4（日）			
	会場１（講堂）	会場２（4階和室）	会場３（2階会議室）
9:30-10:00	⑱藤山夏波	㉓丹羽宣子	㉘杤山瑠南
10:00-10:30	⑲村中大樹	㉔江口恭平	㉙山崎哲
10:30-11:00	⑳竹原信也	㉕椙本歩美	㉚宮崎嵩啓
11:00-11:30	㉑吉本裕子	㉖児玉恵美	㉛板谷めぐみ
11:30-12:00	㉒奈良雅美	㉗田沼幸子	㉜中野陽子／横川剛毅
12:00-13:30	昼休み（1階会議室にてシンポジウム打ち合わせ）		
13:30-16:40	大会記念公開シンポジウム「地域女性史」　（講堂）		
16:40～	閉会挨拶（会長・開催校理事・次回開催校理事あいさつ）（講堂）		

■ 10 月 3 日（土）

会場　松山大学樋又キャンパス　松山市道後樋又 6－3

10:00　　開会あいさつ（会長　石川良子）　(H2A)
　　開催内容説明（研活　安岡健一）
10:20　　各会場へ移動
10:30～12:00　自由報告部会　1 日目
12:00～13:30　お昼休み
13:30～16:00　テーマセッション・自由報告部会 1 日目・研活ワークショップ

● 会場１（H2A）
　司会：謝花直美、酒井順子
木川剛志「都市の記憶を聞く―地方政治家のライフヒストリー・ドキュメンタリー制作を通して」
松原かおり「観光映像制作を通した地域の語りの記録実践 ― 姫島村でのゼミ活動を事例に」
吉成哲平、三好恵真子「戦禍のベトナムに重なりゆく沖縄の生活者たちの痛み：写真家 石川文洋が人びとの表情から表現しようとした「戦争の底にあるもの」」
【テーマセッション】山本恵里子（コーディネーター）「映画『大地よ―アイヌとして生きる』の記録する宇梶静江とアイヌ史：活動家のことばと映像は世代と国境を越えられるか」

● 会場２（H2B）
　司会：小林多寿子、飯倉江里衣

田野倉和子「不登校経験に対する意味づけの再編成過程―学校卒業後の他者との関係に着目して」
林貴哉「在米ベトナム人コミュニティにおける言語教育を通じた難民としての記憶の継承」
大森優美「抑圧的体制下の日常をめぐる郷愁的な語りをどうとらえるか―南アフリカ・ステレンボッシュに暮らす女性たちの生活史の語りから」
港那央「べ平連の運動における日常性と非日常性の交差：長崎べ平連の「食」と「ケア」をめぐる女性たちの語りから」
亀井恭祐「戦後広島における平和教育―福山市における是正指導と解放教育に着目して」
森谷理紗「ある満州引揚孤児のライフヒストリーと歴史的連関―京都・満州・長崎・アウシュビッツ・沖縄」
【研活ワークショップ】

● 会場３（H2C）
　司会：李洪章
金汝卿「障害のある在日朝鮮人女性の自立生活における交差的経験」
木村豊「戦争の記憶とライフヒストリー―東京大空襲の継承活動を事例として」
大森貴弘「戦争経験者による死者の代弁をメディアはどう扱うのか」
千葉直美「東日本大震災を経験した女性達の聞き書き―宮城県石巻市から」
吉田暁生「インド北東部マニプール州およびナガランド州山間部の戦争記憶と原始宗教」
大池真知子、武輪敬心、髙井裕二「身体の経験を探る映像的手法としてのボディマッピング―性的アシスタントの事例紹介」

16:10-17:40　　総会（H2A）
18:00-20:00　　樋又キャンパス１階食堂ル・ルパで懇親会

■ 10 月 4 日（日）
会場　子規記念博物館　松山市道後公園 1－30
9:30～12:00　　自由報告部会　２日目

● 会場１　（講堂）
　司会：橋本みゆき
藤山夏波「「隠れる」信仰、語り紡がれるカクレキリシタンの過去・現在・未来―長崎県平戸市生月町のオーラル・ヒストリー」
村中大樹「「物語」のある先に：ブラジル・サンパウロ市近郊コチア周辺をめぐる移民の「物語」と「オーラル」の往復分析」
竹原信也「満州女学校における挺身看護隊・八路軍留用の歴史における資料収集について」
吉本裕子「アイヌ舞踊の舞台化に関わる和人の当事者性はいかに形成されるのか―複数のライフストーリーと身体経験の分析から」
奈良雅美「フィリピン女性たちの語りはどう生き続けるか――ライフストーリーの社会的循環」

● 会場２　（4 階和室）
　司会： 大門正克、滝田祥子
丹羽宣子「寺院の日常のなかで仏教はいかに実践されているのか―寺院を営む人々の語りから」
江口恭平「「保護司」として生きるということ―ある元保護司のライフストーリーから」
椙本歩美「石井露月の句碑をめぐる語りと記憶――秋田県女米木集落内外の比較から」
児玉恵美「行方不明の家族をめぐる想起のライフヒストリー―レバノン内戦の事例から」
田沼幸子「対話としての民族誌―デヴィッド・グレーバーの Lost People」

● 会場３　（2 階会議室）
　司会：須田佳実、佐藤量
杤山瑠南「韓国における反性買売女性人権運動の系譜―済州島の事例から」
山崎哲「残留を悼む―中国・サハリン残留日本人の公墓にみる記憶継承の実践」
宮崎嵩啓「宮城県石巻市「私設平和資料館」の歴史実践(2)―オーラル・ヒストリーと歴史教育」
板谷めぐみ「海外での証言活動と被爆証言―橋爪文の事例から―」
中野陽子、横川剛毅「「あの時」を生きた保育者の語り　―東日本大震災を経験した元幼稚園園長のライフヒストリー研究」

12:00-13:30　　昼休み
13:30-16:40　　大会記念公開シンポジウム「地域女性史のいまーここに生き　ここを変えるー」(講堂)
16:40～　　閉会挨拶（会長・開催校理事・次回開催校理事あいさつ）（講堂）

３．自由報告・テーマセッション要旨
【1日目】　松山大学樋又キャンパス2階
● 会場１（H2A）
木川剛志「都市の記憶を聞く―地方政治家のライフヒストリー・ドキュメンタリー制作を通して」
本発表では、2026 年和歌山市長選挙に出馬した元和歌山市長・旅田卓宗氏へのライフヒストリー・インタビューと、その選挙戦を記録したドキュメンタリー制作を通して、都市の記憶を映像として記録・継承する方法について検討する。旅田氏の語りには、戦後の和歌山、地域社会、政治文化、都市開発、市民との関係が重層的に織り込まれており、彼の人生史は都市史・地域史として読み解くことができる。本発表では、映像ドキュメンタリー制作の実践を踏まえ、一地方政治家のライフヒストリーから読み取れる地域の集合的記憶について考察する。あわせて、地方政治家を対象とした映像オーラル・ヒストリーの方法論を提示し、その学術的意義について論じる。

松原かおり「観光映像制作を通した地域の語りの記録実践 ― 姫島村でのゼミ活動を事例に」
本報告では、観光映像における地域の語りと記録性について、学生との映像制作実践を通して検討する。これまで筆者は、観光映像における地域住民の語りや記録性に着目し、地域の記憶や文化を映像として残す可能性について研究を進めてきた。近年は、学生との観光映像制作実践を通して、地域をどのように捉え、映像表現へと接続していくかについても関心を広げている。本報告では、

現在進行中である大分県姫島村での観光映像制作プロジェクトを事例として、地域調査、映像分析、企画検討などの実践過程を報告する。また、観光表現としての創作性と地域の記録としての記録性の関係について考察し、観光映像とオーラル・ヒストリーの接点について検討する。

吉成哲平、三好恵真子「戦禍のベトナムに重なりゆく沖縄の生活者たちの痛み：写真家 石川文洋が人びとの表情から表現しようとした「戦争の底にあるもの」
写真家の石川文洋は、1960 年代後半のベトナムにおける戦場取材を契機に同地や沖縄を撮り続けていったことが知られている。他方、これまで発表者らは米軍統治下の沖縄の現実の衝撃から日本本土の現状を問い直していった東松照明に加えて、彼の表現からの触発と距離の中で変わりゆく沖縄の暮らしの記録を模索した比嘉康雄や平良孝七らの足跡を独自の方法論である「写真実践」より具体化することで、各々の「戦後」経験のあり方が同時代の沖縄における写真記録を方向付けていったことが見えてきた。そこで、本発表では石川がベトナムにおいて人びとの表情の中に見出した「戦争の底にあるもの」を表現することへの葛藤を抱えつつ、重ね合わせるように捉えていった沖縄に生きる人びとの生活について報告する。

【テーマセッション】山本恵里子（コーディネーター）「映画『大地よ―アイヌとして生きる』の記録する宇梶静江とアイヌ史：活動家のことばと映像は世代と国境を越えられるか」
ドキュメンタリー映画『大地よ――アイヌとして生きる』は、藤原書店により2022年に製作され、2023年4月にリリース、日本各地の映画館で上映された。アイヌ人権活動家 宇梶静江の生き様と世界観を、数年にわたり集められた彼女のインタビューをもとに、本人の言葉を通して記録されたビデオ映像詩ともいうべき記録映画である。先住民族アイヌの辿った苦難の歴史を、当時80代（現在93才）の一アイヌ女性の語るライフ・ヒストリーでどこまで伝えられるだろうか。宇梶が未来の世代アイヌと人類への遺言と名付けた膨大なインタビューは、プロデューサーの藤原出版社のバックアップと、「失われゆく民族の文化伝統や歴史を記録する」という意欲に燃えた国際性と音楽・芸術に長けた監督の手腕により、オーラル・ヒストリー・インタビューのドキュメンタリー映画を超え、芸術性の高い民族映画となったといえるのではないか。

本作品は日本国内向けであったが、英語字幕を付けてもらい、山本が2025年9月ポーランドで開催された第23回国際オーラル・ヒストリー学会大会（IOHA）にてパネルセッションとして上映、また今年9月にはアメリカ合衆国ノースダコタ州 United Tribes Technical College での先住民国際大会（Indian Powwow）においてテーマセッションとして上映予定である。これらにおける海外オーラル・ヒストリー研究者、そして先住民族からの評価・反応もご報告して、JOHA会員の感想・ご意見もうかがいながら、日本における「オーラル・ヒストリー・ドキュメンタリー映画」がマイノリティの研究、人権活動でどのような役割を果たせるか、探って行きたい。

コーディネーター／報告者：山本恵里子（同志社大学研究員・元椙山女学園大学文学部教授）
趣旨説明、映画の概要、海外セッションでの反応等の報告

ビデオトーク
① 藤原良雄（藤原書店社長・映画プロデューサー）：宇梶静江ドキュメンタリー映画製作の意図
② 金大偉（監督、ミュージシャン、総合芸術プロデューサー）:『大地よ』の製作過程と目指したもの、宇梶静江インタビューの方法、編集プロセス、アイヌへのまなざし

コメンテーター
① 酒井順子（女性史研究家・地域オーラル・ヒストリー実践活動家）
女性史としての『大地よ』の意義
② 番匠健一（社会理論・動態研究所研究員、北海道近現代史・移民史・平和学）
北海道史からみた位置づけ

映画は105分あるので、割愛しながらもできる限り多くを上映する予定である。音声言語は日本語のアイヌ語で、英語字幕がつく。参加者にはアンケートに答えてもらいながら、オーラル・ヒストリー・ドキュメンタリー映画を考えたいので、ご協力をお願いしたい。

● 会場２　(H2B)
田野倉和子「不登校経験に対する意味づけの再編成過程―学校卒業後の他者との関係に着目して」
本報告では、小中学校時代に不登校を経験した者が学校卒業後の社会参加の場面で過去の不登校経験をどのように意味づけていくのかを検討する。報告者がこれまで実施してきた調査では、進学や就職の場面で不登校経験による影響を受けながらも、時間が経過する中で過去の経験の意味を問い直し、折り合いをつけながら生きている人々と出会ってきた。しかし、不登校経験者の認識に迫ったこれまでの先行研究は、当事者の不登校経験に対する意味づけの一端を明らかにする一方で、その意味づけがその後の社会関係の中でいかに再編成されていくのかという動態的な過程については十分に検討されていない。本報告では先行研究の問題意識を引き継ぎつつ、「公的な不登校支援」を経由した2名の不登校経験者の語りをもとに、在学中に否定的に意味づけられていた不登校経験が成人後の他者との関係を通してどのように再編成されているのかを明らかにする。

林貴哉「在米ベトナム人コミュニティにおける言語教育を通じた難民としての記憶の継承」
アメリカ合衆国カリフォルニア州ではベトナム人コミュニティが形成されており、地域や学校で第二世代以降に対するベトナム語教育が実施されている。参与観察を通じて、これらの教育活動はベトナム語習得の機会となっているだけではなく、「ベトナム難民」として渡米した第一世代の経験と記憶の継承をめざしたものであることが見出された。本発表では、在米ベトナム人コミュニティによって開催されている教師トレーニング・シンポジウムやそこで編纂された教科書、またこれらの取り組みに携わる教師の語りを対象に、在外ベトナム人コミュニティにおけるベトナム語教育がどのような規範のもとで構想され、何が継承されようとしているのかを考察する。

大森優美「抑圧的体制下の日常をめぐる郷愁的な語りをどうとらえるか―南アフリカ・ステレンボッシュに暮らす女性たちの生活史の語りから」

本報告では、報告者が 2025 年から 2026 年初頭にかけて南アフリカで実施した生活史の聴き取りをもとに、抑圧体制下の日常をめぐる女性たちの語りに現れるノスタルジア（郷愁）について考察する。報告者は、同国南部ステレンボッシュにおいて、アパルトヘイト体制で構築された異なる三つの「人種」集団の女性たちの生活史を収集した。彼女たちの語りに共通してみられたのは、報告者の予想に反し、アパルトヘイト期の生活を肯定的に回想する郷愁的な感情であった。本報告では、S. ボイムが提示した「復古的／懐古的ノスタルジア」の概念を手がかりに、絶えず不安に見舞われる日常生活が、いかにして抑圧的な体制への郷愁を生み出しているのかを検討する。

港那央「ベ平連の運動における日常性と非日常性の交差 : 長崎ベ平連の「食」と「ケア」をめぐる女性たちの語りから」
本報告は、1960 年代後半から日本で展開されたベトナム反戦市民運動体「ベトナムに平和を！」市民連合（ベ平連）に参加した女性たちの語りを通じ、運動における「日常性」と「非日常性」の交差を検討する。長崎県長崎市で結成された長崎ベ平連において、抗議活動は、メンバー宅の事務所での共同飲食や育児といった「日常」の営みと密接に結びついていた。同時に、運動の場は異なる社会層との遭遇という「非日常」をもたらした。この交差は、生活の場を運動継続のインフラとしつつ、他者との遭遇を通じて多様な主体を包摂した点に重要な意義がある。こうした運動経験が約 55 年後の語りによって再解釈される過程を分析し、ベ平連の運動が持っていた特質を改めて浮き彫りにする。

亀井恭祐「戦後広島における平和教育―福山市における是正指導と解放教育に着目して」
本報告は、戦後広島において展開されてきた平和教育が、1998 年の文部省の是正指導により大きく転換されることになる。是正指導とは、1998 年 5 月 20 日に文部省によって広島県教育委員会に通達されたものである。とりわけ福山市においては、是正指導前後において実践されていた教育内容が大きく変化する。この是正指導をめぐり文部省と教職員組合をはじめ部落開放同盟は、軋轢を生むことになる。それに伴い、学校現場も板挟みにあい、学校長が自殺してしまうケースも発生した。これら一連の動きを通して、現場の教師、部落解放同盟の当事者たちは、是正指導をはじめ福山市で行われていた解放教育をどのように捉えていたのかを、それぞれのオーラル・ヒストリーに着目して考察する。

森谷理紗「ある満州引揚孤児のライフヒストリーと歴史的連関―京都・満州・長崎・アウシュビッツ・沖縄」
本発表は、ある満州引揚孤児のライフヒストリーをもとに、その語りにおける人生の意味づけと、そこから見えてくる歴史的連関を検討するものである。開拓団家族として渡満するも孤児となり、キリスト教修道女の助けで帰国したのち、長崎のカトリック孤児院で保護され、石工として慰霊碑の建立に携わった人生をたどると、満州、シベリア抑留、長崎、アウシュビッツ、沖縄といった通常は別個に論じられる歴史的事象が、一人のライフヒストリーのなかで交差していることが見えてくる。一方、本人の語りでは、人生における偶然の出来事が後年の経験を踏まえて相互に関連づけられ、意味づけられている。本発表では、こうした語りの形成過程を分析するとともに、ライフヒスト

リーを歴史的連関を読み解く分析上の結節点として捉えることの可能性について考察する。

【研活ワークショップ】　新規入会者・大会初参加者との交流・情報交換　進行：安岡健一

さまざまな立場の人が関わる本学会には、多くの新規入会者があります。大会が新規入会者や大会初参加者の方にとって、より実りある時間になるために、交流・情報交換のためのワークショップを開催します。新規入会者や大会初参加相当の方が少なくとも1人は入るように少人数のグループをつくり、それぞれの研究テーマの紹介や、オーラル・ヒストリーを実践していくうえで悩んでいること、大切にしていることなどについて意見交換をする時間を作ります。また、これまでの学会活動を紹介する時間も設けます。大会受付時に、参加意向を伺いますのでよろしくお願いします。卒論に取り組む学部生・修士論文に取り組む大学院生などの参加も歓迎します。

● 会場３　（H2C）

金汝卿「障害のある在日朝鮮人女性の自立生活における交差的経験」

複合差別や交差性（Intersectionality）は、単一の差別カテゴリーでは捉えきれない経験を可視化してきた。ジェンダー、民族や人種、階級、国籍、障碍などの社会的属性が相互に作用するなかで、抑圧がいかに形成され、それを生き抜くエイジェンシーがいかに生み出されるのかが問われてきた。一方で、障碍者の自立生活、とりわけ脳性まひ者が地域で生活を営む上で、エスニシティ、ジェンダー、介助者や家族との関係、地域社会などがどのように交差するのかについては、検討の余地が残されている。報告では、自立生活をしている在日朝鮮人女性 A さんのライフヒストリーに着目する。A さんや介助者を対象にした聞き取り調査、報告者の介助経験などを中心に、A さんの経験を交差性の観点から考察する。

木村豊「戦争の記憶とライフヒストリー―東京大空襲の継承活動を事例として」

戦後の日本社会では、戦争を体験した人びとが中心となって戦争の記憶を継承する活動が進められてきた。そうした活動のなかでは、戦争を体験した人びとによって、戦時中のある出来事の経験が語られることが多いが、同時にそこでは、生まれてから現在にいたるまでのライフヒストリーが語られることも少なくない。特に近年は、戦争の記憶を継承する活動において戦争を体験した人びとが自らのライフヒストリーを語るという側面が拡大しているように思われる。そこで本報告では、東京大空襲の継承活動を事例に、戦争を体験した人びとはどのように自らのライフヒストリーを語ることを通してどのように戦争の記憶を継承しようとしているのかについて社会学の観点から検討したい。

大森貴弘「戦争経験者による死者の代弁をメディアはどう扱うのか」

戦争経験者の多くは、死者の思いを語る＝代弁する。歴史実践は日常の中に存在しているとするならば、私たちは死者の言葉にも耳を傾けるべきである。戦争の記憶は、メディアというフィルターを通して私的なものから公的記憶、社会で共有される記憶になると言われている。であるならば、メディアが死者の代弁を報じなければ、社会で共有されない可能性がある。メディアは死者の代弁をどう扱うのか。伝えようとするのか、あるいはしないのか。伝えるとしたら、そこには何か線引き

があるのか。こうした疑問点について、戦争経験者への取材を数多くこなしてきた雑誌や新聞の記者たちへのインタビュー調査を通じて明らかにしてみたい。

千葉直美「東日本大震災を経験した女性達の聞き書き―宮城県石巻市から」
２０１１年３月１１日に発生した東日本大震災から１５年が経過した。あの震災を女性達はどのように体験し、どのように生きてきたのか。何を思い、何を感じ、何を考えて暮らしてきたのか。被災者と呼ばれる女性達の姿とその意味を、聞き書きを通じて考察する。
報告者自身（千葉直美）も甚大な被害を受けた宮城県石巻市に住んでいる。生まれ故郷であり、震災当日も、震災の前も後も住み続けている。その後の復興と復旧の過程と共に生きている。
震災の記憶は被災者一人ひとりの人生の流れの中で折り目となって消えることはない。復興とは何か、回復とは何か、そして伝承とは何かを聞き書きという形で検証したい。

吉田暁生「インド北東部マニプール州およびナガランド州山間部の戦争記憶と原始宗教」
第二次世界大戦のインパール作戦についての情報は、軍部の記録や帰還兵の手記によるものが中心であり、現地住民の視点から日本兵との相互行為を捉えた研究は乏しい。本研究では、インド北東部のマニプール州・ナガランド州の山間部で、戦争を経験した現地の高齢者に対する半構造化インタビューを実施した。その結果、日本兵との物々交換、女性兵士との交流に加え、英国支配からの解放のみならず、日本軍の侵攻を現地の原始宗教の伝承と結びつけて受け止めた住民側の認識など、具体的な接触様式を実証的に掘り起こす成果を得た。本成果は、過酷な戦時体験が現地住民にいかに受容されたかを明らかにし、オーラルヒストリーによる戦時史の多角化に貢献する。

大池真知子、武輪敬心、髙井裕二「身体の経験を探る映像的手法としてのボディマッピング―性的アシスタントの事例紹介」
ボディマッピングとは、一畳大の台紙に自分の身体の輪郭を型どり、そこに経験や感情を言葉と図像でかき込んで、等身大の人生のマップを作るアート実践である。２００２年に南アフリカで HIV とともに生きる女が実施して以来、移民、クイア―、障害のある人などの間で広く行われている。セラピーや社会運動だけでなく、参加型の調査ツールとしても使用され、インタビューでは掘り起こせない経験や感情を探るのに使われている（詳細は学会誌２２号実践報告参照）。
本発表では、障害のある人のニーズに応じ性的なサービスを提供する「輝き製作所」の実践者が行ったマッピング事例を紹介し、ボディマッピングをとおして、身体、性、情動にアプローチする可能性について検討する。

【2日目】　子規記念博物館

● 会場１（講堂）

藤山夏波「「隠れる」信仰、語り紡がれるカクレキリシタンの過去・現在・未来―長崎県平戸市生月町のオーラル・ヒストリー」
長崎県平戸市生月町では、約400年以上も前から続くカクレキリシタンの信仰が現在も継続してある。生月では1550年代に、島民の一斉改宗が行われたが、弾圧の時代を迎えると、島民たちはキリシタ

ンであることを隠すことで自身達の信仰を守るようになった。その信仰形態を受け継いでいる人々は、現在「カクレキリシタン」と呼ばれている。本発表では、生月の舘浦地区の須古踊りという行事をめぐる、カクレキリシタンのオーラル・ヒストリーを取り上げる。その口頭伝承から、本発表は、カクレキリシタンの信仰が、神道や仏教、民間宗教が混淆した盆祭りに、いかに見えない形で伏在するようになり、それが現在どのように生月町民やカクレシタンによって守られ、生きられ、今後、未来に向けてどのような軌跡を描いていくことになるかを明らかにする。

村中大樹「「物語」のある先に：ブラジル・サンパウロ市近郊コチア周辺をめぐる移民の「物語」と「オーラル」の往復分析」
本発表では、発表者が大学院の修士課程時代（2014年〜2015年）におこなった高知県出身のブラジル移民一世への聞き取りデータを再考する。聞き手として知識が十分に揃わないなか、語り手から客観的に検証可能な事実（史実）をトレースし歴史叙述を試みる発表者と、必ずしも聞き手の意図とは異なるかたちで＜私しか語り得ない重要な記憶／そうでない記憶＞を語る語り手との差異、さらに、聞き手とともに語り手の＜周辺＞にかんする集団的な記憶（物語）の「忘却」ないし「継承」を課題視する相互の意味に着目する。以上の考察を経ることで、ブラジル・サンパウロ市近郊コチアをめぐる移民の「物語」の現代における形成過程を明らかにすることが本発表の目的である。

竹原信也「満州女学校における挺身看護隊・八路軍留用の歴史における資料収集について」
JOHA16・17・２３回大会にて、満州・錦州女学校時代に挺身看護隊を経験し、終戦後に八路軍に従軍看護婦として留用された女性の歴史について、本人・遺族の語りや遺品、記事などを基に口頭報告を行ってきた。また聞き書き資料として『日本オーラル・ヒストリー研究』第１５巻（2019年）にて発表している。　今回の報告では、前回報告に引き続き2024年より新潟県新発田市において実施している遺族への聞き取りや、写真、手記、新聞記事、遺品等の収集・整理について報告をする。また遺族の高齢化・世代交代が進むなか、受け取り手を失いつつある遺品や記録を、誰が、どのように保存し、継承していくのかという課題についても報告する。

吉本裕子「アイヌ舞踊の舞台化に関わる和人の当事者性はいかに形成されるのか―複数のライフストーリーと身体経験の分析から」
本発表は、アイヌ舞踊の舞台化に関わる和人のライフストーリーを比較し、アイヌとの関係性や舞踊実践における身体経験を通じて、和人としての自己の立場をいかに問い直し、その当事者性を形成していくのかを明らかにすることを目的とする。これまで報告者は、観光地でアイヌ舞踊の踊り手として活動する一人の和人女性の語りを通して、和人としての当事者性の形成過程を検討してきた。本発表では視点を広げ、舞台化に関わる多様な背景をもつ複数の和人のライフストーリーを、身体経験にも着目しながら比較検討することで、その形成過程にみられる共通性と多様性を明らかにする。さらに、舞台を見る多数派のまなざしも分析に組み込むことで、和人の当事者性を、アイヌとの関係性や舞踊実践における身体経験、多数派のまなざしのなかで生成・変容する動態的な過程として捉える視座を提示する。

奈良雅美「フィリピン女性たちの語りはどう生き続けるか――ライフストーリーの社会的循環」
本報告では、報告者が行った、日本に長年暮らすフィリピン女性5人のライフストーリーの聞き書きと、書籍化以降の実践プロセスを取り上げる。ライフストーリーは、インタビューによって完結するものではなく、社会へ共有される過程において、語り手・聴き手・読者との相互作用を通し、その意味が更新され続ける。語り手は自身の人生を改めて意味づけ直し、読者は自らの経験と重ね合わせながら語りを受け止め、その経験がさらに他者へと共有されることで、ライフストーリーは社会のなかで循環していく。本報告では、書籍化以降に生じた語り手と読者の具体的な反応や対話を事例に、この社会的循環のプロセスを検討し、オーラルヒストリーの社会的意義と実践の可能性を考察する。

● 会場２（4階和室）
丹羽宣子「寺院の日常のなかで仏教はいかに実践されているのか―寺院を営む人々の語りから」
仏教は教義としてだけではなく、人々の日常の実践として生きられている。本報告は、住職とその家族によって営まれる寺院（日本独自の寺院形態である「家族経営型寺院」）で暮らす人々の語りをもとに、住職家族としての役割がどのように身につけられ、意味づけられていくのかを問う。法要準備や檀家対応、家族内の役割分担のなかで、宗教的語彙は誰かに命じられることなく実践を方向づける。「法華経は水の教え」と語られるように、同じ語彙も、それが用いられる関係性によって意味や働きを変え、時に人を縛り、時に規範を問い直す契機ともなる。寺院を営む人々の語りを通して、仏教が日常実践のなかでどのように生きられ、宗教的語彙や規範がどのように経験されているのかを考えたい。

江口恭平「「保護司」として生きるということ―ある元保護司のライフストーリーから」
本報告は、ある元保護司のライフストーリーの検討を通じて、語り手がその役割をいかに引き受け、活動を意味づけているのか、その一端を明らかにすることを目的とする。従来、保護司は、保護観察官とは異なる「地域性・民間性」を備えた存在として説明されてきた。こうした説明は、更生保護の研究・実務領域において、保護司を理解するためのモデル・ストーリーとして機能してきた。しかし、こうした説明のみでは、更生保護の現場で実際に起きていることを十分に捉え得ない。そこで本報告では、対象者・保護観察官・地域社会との関係、さらには自身の人生との関連に着目し、語り手が自らの保護司経験をどのように意味づけているのかということを語りから分析する。そして、制度的な保護司理解と語り手自身の保護司経験との重なりとズレを示す。

椙本歩美「石井露月の句碑をめぐる語りと記憶――秋田県女米木集落内外の比較から」
本報告は、俳人・石井露月に関する句碑を通したローカルな記憶の生成について検討する。分析対象は、石井露月の出身地である女米木集落内外に建立された句碑群である。建立者への聞き取り、碑文、同人誌、広報誌などを用いて、句碑を通してどのような記憶が生成されたのかを明らかにする。私的な慰霊や供養として始まった句碑建立は、石井露月の逝去後、個人だけでなく俳句結社や地域住民や行政による偉人顕彰や地域文化の継承、さらには観光振興という共的・公的な活動へと展開した。女米木集落内でも記憶は再構築され、地域外においては建立者ごとに異なる記憶が生成

されていった。句碑の建立は、多様な主体によるローカルな記憶の生成を可能にする技法といえる。

児玉恵美「行方不明の家族をめぐる想起のライフヒストリー―レバノン内戦の事例から」
レバノン内戦（1975-1990年）後の社会では、内戦の只中に家族が行方不明になり、その「死」が想定されつつも遺体がいまだ見つからない人が少なくとも約1万7415人以上いると推定されている。本報告は、こうした行方不明者を残された家族がいかに想起し、当人の安否も行方も不明のままである現実といかに向き合ってきたのかを、レバノン人ドルーズ派（イスラーム少数派）女性のライフヒストリーを通して検討するものである。残された家族の日常の中に、行方不明になった夫の強制失跡をめぐる記憶がいかに立ち現れていたのかを分析することによって、行方不明のままの身体が、取り残された家族や戦後社会に対していかなるメディア性を有し、いかに情動を触発しているのかに迫り、明らかにすることを目指す。

田沼幸子「対話としての民族誌―デヴィッド・グレーバーのLost People」
人類学者デヴィッド・グレーバーは、マダガスカルでの長期調査をもとに『Lost People: Magic and the Legacy of Slavery in Madagascar』(Indiana University Press2007)を書いている。Goodreadsという書評サイトにおいて、彼自身が「個人的にはこれが僕の最高傑作だと思っている。でも、ほとんど読まれないのも理解できる」と書き込んでいる。確かに同書は、彼が前書きで書いているように、「民族誌とロシア小説を足して二で割ったような」趣きと長さがある。一方で、これは彼が現地で仲良くなった人々の言葉を録音し、できるだけその語り口を失うことなく直接引用しているためでもある。彼はそれを対話的民族誌として書いたとしている。本発表は同書をライフヒストリーという視点から捉えなおす試みである。

● 会場３（2階会議室）
朽山瑠南「韓国における反性買売女性人権運動の系譜―済州島の事例から」
現在、韓国では性買売を女性に対する暴力と捉え、「性買売女性の非犯罪化」と「買春・斡旋行為の厳罰化」を目指す反性買売女性人権運動が取り組まれている。同運動の開始点として語られてきたのは、2000 年代初頭に相次いだ性買売施設での火災惨事である。一方、それ以前にも性買売をめぐる女性運動は存在した。その代表例が、1970 年頃に本格化した日本人男性観光客向け性買売斡旋に対する「キーセン観光」反対運動である。「キーセン観光の本場」と称された済州島においても、1980年代から 1990 年代初頭にかけて持続的な反対運動が展開され、その過程では当事者中心的な性買売女性支援のあり方が模索された。本報告では、済州島で性買売問題に取り組んだ女性活動家らの記憶を掘り起こし、同地域における反性買売女性人権運動の系譜を「キーセン観光」反対運動との接続から捉え直す。

山崎哲「残留を悼む―中国・サハリン残留日本人の公墓にみる記憶継承の実践」
日本帝国崩壊後、生活をしていた場所から日本に引き揚げることができなかった、あるいは「引き揚げなかった」人々がいた。かれらの「残留」をめぐる記憶は、現在の日本社会において限定的な形で継承されている。その一つが、「公墓」である。本報告では、中国・サハリン残留日本人が眠る公

墓が、「中国残留」「サハリン残留」という歴史を現在いかに継承し、来訪者や関係者にその経験を伝えているのかを、公墓建立に携わった人々へのインタビューを通じて明らかにする。さらに、公墓が追悼の場にとどまらず、歴史認識や集合的記憶を継承する実践の場として果たす役割について考察する。

宮崎嵩啓「宮城県石巻市「私設平和資料館」の歴史実践(2)―オーラル・ヒストリーと歴史教育」
岩手大学教育学部社会科教育学ゼミでは昨年,宮城県石巻市で私設平和資料館を営む佐々木慶一郎への聞き取り調査を行った。戦後生まれの元教師・佐々木が,自宅に平和博物館を開設するに至る経緯と思いに触れ,教員養成課程に所属する学生たちは衝撃を受ける。その後ゼミで証言の文字起こしと内容分析に取り組むも,「消化不良だ」との声が学生から学期末に上がり,佐々木の実践の解釈や私たちの応答責任をめぐって議論が続けられた。この間学生はそれぞれの方法で戦争を体験し,歴史を生きた人間をまなざし,共感・困惑・葛藤し,歴史教育との接続を検討し,自己対話を行っていた。本報告は聞き取り調査に同行した学生たちの歴史実践に焦点をあて,その営みを跡付けつつ,歴史教育におけるオーラル・ヒストリーの意義について私見を提示したい。

板谷めぐみ「海外での証言活動と被爆証言―橋爪文の事例から―」
本研究では、広島で被爆し、70 歳以降、個人で海外において継続的な証言活動を行ってきた橋爪文氏を対象に、海外での証言活動における被爆証言について検討する。橋爪氏へのライフヒストリー・インタビューおよび参与観察をもとに、証言会における質疑応答や聞き手との交流、証言会前後の関わりを分析する。さらに、橋爪氏を取り巻く関係者への聞き取りも参照しながら、海外での聞き手との対話や証言会の場が被爆証言にどのように関わっているのかを検討する。以上を通して、個人による海外での証言活動という事例から、海外における被爆証言の特徴を明らかにすることを目的とする。

中野陽子、横川剛毅「「あの時」を生きた保育者の語り　―東日本大震災を経験した元幼稚園園長のライフヒストリー研究」
本研究では、東日本大震災を経験した元幼稚園教諭A氏へのライフヒストリー・インタビューを通して、保育者としての価値観の形成や震災経験の継承のあり方について明らかにした。A氏は震災支援を契機に、保育は子どもだけでなく家庭や地域を含めて支える営みであり、保育者にはソーシャルワーカーとしての視点も求められると認識するようになった。また、大学での学びや福島への訪問を通して、学生には「見えないものに目を向ける力」や、当事者の声に耳を傾け、自ら考える姿勢を育むことを重視していた。震災経験は、目の前の事象だけでなく背景にある人々の思いや社会的課題を捉える保育観へとつながっており、保育者養成における実践的学びの重要性が示唆された。

４．大会記念シンポジウム
「地域女性史のいまーここに生き　ここを変えるー」

【趣旨】

松山においてオーラル・ヒストリー学会大会を開催することにちなみ、地域女性史の草分けとも言える愛媛県の女性史サークルの歩みを踏まえて、地域女性史の現在についてシンポジウムを開催する。「歴史を学ぶのは、地域住民がその地域社会・国・世界を変えていく担い手となる、その道筋を明らかにすること」(『むぎ』33 号,2024) という愛媛県の女性史サークルの川又美子さんの言葉を踏まえ、まず、1950 年代から現在までの愛媛の女性史サークルの歩みについて川又美子さんに話していただく。つぎに道後にあった遊廓の調査経過について人見佐知子さんに報告していただき、続いて、柳原恵さんに、全国における女性史の研究活動の中に愛媛の女性史サークルを位置づけていただく。その後、地域女性史研究会代表の山村淑子さんに 3 人の報告にコメントをしていただき、最後に、フロアも交えて女性史の研究活動の歴史的意義について議論する機会を持ちたい。

日本オーラル・ヒストリー学会では、これまで何度も地域女性史をテーマとしたシンポジウムを開催しており、愛知県において最初の全国女性史研究交流のつどいを発案した愛媛女性史サークルに登壇していただくことは、松山市での開催にふさわしいと考える。地元に歴史ある女性史サークルがあることを一般市民に知ってもらうために、この大会記念シンポジウムを入場無料で公開する。

【10 月 4 日（日）　大会２日目　13：30～16：30】

司会　今野日出晴（学会理事　元愛媛大学教授・岩手大学名誉教授）

13:30～13:35　シンポジウム趣旨説明：山田富秋（開催校理事、松山大学名誉教授）

13:35～13:40　司会・報告者紹介（今野日出晴）

13:40～15:10　発表

話題提供者

1　川又美子（愛媛・女性史サークル）

愛媛・女性史サークルの歩み

2　人見佐知子（学会元理事　近畿大学）

道後松ヶ枝町遊廓史料と女性史サークルのこれまでとこれから

3　柳原恵（学会理事　立命館大学）

地域女性史とオーラル・ヒストリー―女性史サークルの実践を中心に

15:10～15:25　休憩

15:25～15:40 コメント　山村俶子（地域女性史研究会代表）

15:40～15:50 リプライ

15:50～16:40 質疑応答

16:40　　閉会

Ⅱ．第 12 期理事会報告

第 1 回 臨時理事会 議事録

【日時】2026 年 5 月 20 日（水）18:30～19:30
【開催形式】Zoom によるオンライン開催
【出席】石川良子、佐々木てる、飯倉江里衣、川又俊則、今野日出晴、酒井順子、須田佳実、根本雅也、野入直美、安岡健一、柳原恵、山田富秋、坂田勝彦
【欠席】高田雅士、橋本みゆき
【議事録作成】坂田勝彦

議題

(1) 会長任期と会則の「ねじれ」状態について

このたび臨時の理事会を開催した目的は、会長任期と学会会則との間に生じている「ねじれ」状態について、理事会で問題の詳細を改めて共有・検討することにある。そこでまず石川会長と佐々木事務局長より本件について説明があった。

- 今期理事会では前期理事会に続いて、石川が会長を務めている。だが本学会会則では、「役員の任期は 1 期 2 年とし、重任は 2 期 4 年までとする。ただし、会長の任期は 1 期 2 年とする」（会則 第 4 章 役員および事務局 第 6 条 6）と定められている。
- 昨年度の総会では石川会長を前期理事会に続いて選出することを承認した一方で、上記の通り、会則との間に「ねじれ」があることを確認した。そこで、今期理事会ではこの「ねじれを解消する必要があることもその際、あわせて確認された。
- だが、この「ねじれ」についてまだ解消に至っておらず、会則の変更など早急に対応をすべきである。
- なお今期理事会では学会改革に向けた WG が発足しており、本件はそちらでもすでに並行して検討が進められている（次回の WG の開催は 5 月 30 日を予定）。

以上を踏まえて、会長および事務局長から本件について、一つの案として下記のものも考えられると説明があった。

> 【案】総会で会則改正、その前後で現会長が辞任し、新たに会長を選出する。現会長の辞任を会則変更の前にするか後にするかはさらに検討が必要であるが、新たに選出された会長が現理事会の残り一年の任期の間、会長職を務める。

この案について、本日（5 月 20 日）の臨時理事会では次の意見が理事（会長・事務局長を除く理事）より出された。

- 仮に上記の案で進める場合、現会長の辞任後、どうやって会長を選出するのか。また、会則では会長が理事会での互選となっているので、今期理事会で改めて選出するのか。

・ なぜ選挙をしないのか。「ねじれ」が生じた責任は理事会にある。会長が辞任するなら理事も辞任し、改めて選挙を行うべきではないか。
・ 本学会における理事の選出の方法自体に再考の余地があるのではないか。現行の会則では、会長の選出は選挙で選出された理事の互選であり、また理事の一定数は選挙で選出された理事の推薦で決まっている。この仕組みははたして民主的か。
・ だが、理事選挙の投票率自体が決して高くはないという現状も直視する必要がある（数票単位の得票で理事に選出されているのが現状である）。
・ 会長だけでなく今期理事会も解散し、理事選挙自体を再度行うことも確かに一つの方向性として考えられるが、それは大きな混乱を生むことになる。また、理事会自体は現行の会則に則って選出されており、会則上の問題があるわけではない。
・ また、上記の案では会長の辞任が前提の話になっているが、そもそも今期理事会として現会長を選出したのであるから（理事選挙で選出された理事が互選という会則に定められた規定に則って現会長を選び、それを理事会も認めてきたのであるから）、理事会として安易に会長の辞任を認めることには慎重であるべきではないか。むしろ、総会に向けて本件にしっかり取り組むことこそが、会長の責任であり、理事会の果たすべき責任ではないか。

加えて、会則変更については、例えば会長に不慮の事態が発生した場合の代替体制も検討すべきではないかという意見が会長と事務局長より出された。

以上を踏まえ、本日の理事会は臨時で開催したものであり、改めて次回理事会（6 月 20 日）で本件について協議を行うことを確認した。

・ なお 5 月 30 日に学会改革の WG が予定されており、そこでも本件については検討することになっているので、WG の議論の内容を反映して形で会則改正のたたき台（原案）を作成し、次回の理事会の前に理事会に共有する。
・ また次回理事会（6 月 20 日）後も別途、本件については総会に向けて臨時理事会を開催し、検討を行う必要があることを想定している。

(2) そのほか

今年度の学会大会の報告募集について、理事や事務局に学会員・非学会員から問い合わせが来ており、いつを予定しているか質問があった。研究活動委員会としては 6 月 1 日に会議を開き、そこで日程等を確定し、速やかに告知することを考えていると説明があった。

なお上記の学会大会での報告募集についてはその後（5 月 21 日）、研究活動委員長より、可能な限り募集期間が長い方がよいことを鑑み、事務局・研究活動委員会・開催校の調整を付けたうえで、来週（5 月最終週）から募集をかけられるよう調整し、理事会にメール審議を諮りたいと提案があった。

第 12 期 理事会 第 3 回 定例理事会 議事録

【日時】2026 年 6 月 21 日（土）14:00～17:30
【開催形式】立教大学 12 号館 3 階社会調査研究室と zoom によるハイブリッド開催

【参加者】石川良子、佐々木てる、飯倉江里衣、川又俊則、今野日出晴、酒井順子、須田佳実、
高田雅士、野入直美、安岡健一、柳原恵、山田富秋、坂田勝彦
【欠席者】根本雅也、橋本みゆき
【議事録】坂田勝彦

議題

(1) 会長挨拶

石川会長より、先日（5 月 20 日）の臨時理事会開催の謝辞および冒頭の挨拶があった。

(2) 前回議事録の確認

佐々木事務局長より、第二回理事会（2025 年 12 月 20 日）および臨時理事会（2026 年 5 月 20 日）の議事録の確認がなされた。

(3) 審議事項・報告事項

① 研究活動委員会

安岡委員長より、今後の研究活動委員会企画の進捗状況について報告があった。

①-1. 「作品と現地を結ぶ」（中村一成『ウトロ　ここで生き、ここで死ぬ』三一書房、2022 年）を 2026 年 11 月 3 日にウトロ平和祈念館（京都府宇治市）で計画している。

①-2. 2027 年 3 月に「研究実践交流会」を計画しており、テーマは「オーラルヒストリー・アーカイブの活用について」、場所は広島、報告者等を現在調整中である。

以上の研究活動委員会の企画について、企画内容とともに、非学会員の講師に対する謝金の金額の確認や必要経費、定員数について質疑が交わされた。

② 第 24 回大会準備について

山田委員と石川会長より、第 24 回大会（10 月 2 日はエクスカーション、3 日は松山大学樋又キャンパス、4 日は子規記念博物館で、大会を開催）について、以下の報告があった。

②-1. エクスカーション（13:30～16:30）は、(1)三津浜探訪：江戸時代から松山の玄関口で栄えた三津浜まち歩き。旧鈴木邸を中心に、周辺の歴史的スポットを散策（定員 10 名、参加費 3,000 円）、(2) 四国朝鮮学校訪問：魁生由美子氏（愛媛大）にご案内いただき、四国朝鮮学校の歴史と現在のレクチャー、授業参観（定員 15 名、参加費 3,000 円）。18 時から懇親会（JR 松山駅前の国際亭、参加費 5,000 円、定員 30 名）。

②-2. 3 日に樋又キャンパス 1 階で生協 100 周年記念展示、3 日と 4 日に子規記念博物館 1 階ロビーで牧瀬茜さんによる写真展示を開催予定であり、準備を進めている。

②-3. 大会記念シンポジウムは、松山でオーラル・ヒストリー学会大会を開催することにちなみ、地域女性史の草分けと言える愛媛県の女性史サークルの方に登壇していただき、全国の動向を踏まえながら、女性史の展開を議論する企画を調整中である。

エクスカーション、展示企画、学会大会の会場の配置や予算案の説明があり、費用の詳細などを詰めつつ、引き続き準備と調整を続けることを確認した。

③　編集委員会

根本委員長が欠席のため、今野・川又・柳原の各委員より以下の報告があった。

③-1.　『日本オーラル・ヒストリー研究』第 22 号の編集作業は順調に進展しており、コンテンツは投稿論文や書評、実践報告に加え、特集「若手実践企画 自分たちで大会の企画をつくる」(担当：大門、根本)、小特集「〈記憶〉と〈語り〉をひらく―オーラル・ヒストリーの表現実践」(担当：柳原）となっている。

③-2.　生成 AI の使用のルール作りについて、議論する必要があるのではないかという意見が出ている。そのため本学会でも、他学会等の動向を把握したうえで、理事会を中心に検討を進めていく必要があることを確認した。

④　広報

野入理事より次号のニューズレターについて現在編集中であり、期日までに必ず原稿の提出を御願いしたいとリマインドがあった。

⑤　会計

高田理事より、今年度の会費納入の御願いを会員向けに発送したことが報告された。

⑥　事務局

⑥-1.　入退会について、前回理事会（昨年 12 月）から今回理事会までに新規入会が 15 名（1 名は再入会)、退会が 5 名（会費未納での退会者を除く）だったと報告された。

⑥-2.　長年使用していることから事務局アドレスに毎日大量のスパムメールが届く状態であり、他学会の事例などを調べつつ、対策を検討すると説明があった。

⑥-3.　「会長任期と現行規程のねじれ」について、6 月の臨時理事会の議論をもとに改めて確認した。また、佐々木事務局長より将来構想 WG（2026 年 5 月 30 日開催）での議論について報告があった。そして、以下の二案について協議を行った。

案１　本件について、「ねじれ」を生んでしまっている状況の責任をとって、まず学会大会の総会で会長が辞任し、その後、臨時理事会を開催して新会長を選出したうえで、改めて臨時総会で規程の改正を行うべきではないか。

案２　本件は昨年度の総会で、(1)石川会長が前期理事会に続き会長職につくと、現行規程との間に「ねじれ」が生じるが、(2)倫理委員会規程の検討など、前期理事会から積み残しの重要案件があり、これらに対し、「ねじれ」を解消したうえで石川会長が引き続き任にあたることが承認されたという経緯がある。この経緯を踏まえると、今期理事会で議論を重ね、今年度の総会で規程を改正し、会長任期と現行規程の「ねじれ」を解消することが、昨年度の総会での決定事項の履行という観点からまず求められているのではないか。

この二案について協議し、理事会として案２を採用することを決定した。確かに、学会規程は最優先すべきルールではあるが、そのことを理解した上で、規程改正を前提に石川良子氏の会長の続投が総会で承認された以上（JOHA ニューズレター第 49 号「総会報告」)、規程改正を成し遂げることが今期の理事会の任務であるという認識を共有した。なお、総会までに臨時理事会を改めて開催し、本件について検討と作業を進めることを確認した。

(4) 次回の理事会について

次回の理事会は、日程調整のうえで臨時理事会として 7 月下旬に開催予定である。

第 12 期 理事会 第 2 回 臨時理事会 議事録

【日時】2026 年 7 月 29 日（水）19：00～20:15

【開催形式】Zoom によるオンライン開催

【出席者】石川良子、佐々木てる、飯倉江里衣、川又俊則、今野日出晴、酒井順子、須田佳実、高田雅士、根本雅也、野入直美、安岡健一、山田富秋、坂田勝彦

【欠席者】橘本みゆき、柳原恵

【議事録】坂田勝彦

議題

(1) 会長挨拶

本日の臨時理事会の開催の趣旨及び議題について説明があった。

(2) 各委員会からの審議・報告事項

① 研究活動委員会

安岡研究活動委員長より、今年度の学会大会（松山開催）について、(1)大会報告申し込みが自由報告（個人・共同で）計 30 件、テーマセッション 1 件のエントリーがあったこと、(2)今回の大会では「研活ワークショップ」として、新規入会者や初大会参加者を中心にした自己紹介や交流を目的としたワークショップを企画していることが報告された。また、以上の自由報告、テーマセッション、研活ワークショップ、大会記念公開シンポジウムをもとに作成中のプログラムについて報告があり、会場の設定や時間設定等を検討した。今後調整の上、確定・公開する予定である。

② 会計

会計（高田理事）より、会計報告として、昨年度の決算案と今年度の予算案の説明が行われ、内容について検討・確認した。

(3) 会長任期と現行規程の「ねじれ」について

会長及び事務局長より、6 月に開催の理事会（臨時）と 7 月に開催の理事会（定例）での議論を踏まえ、会長任期と現行規程との「ねじれ」については、理事会として責任をもって解消すべく、四役（会長・事務局長・編集委員長・研究活動委員長）で規程の改定の検討を進めていることの説明があった。その上で、総会の前に改めてもう一度臨時理事会を開催し、そこで改定案について協議することになった。そして、今年度の総会で規程の改定について会員へお諮りすることを確認した。

Ⅲ．シンポジウム・ワークショップ報告

フィールドワーク「作品と現地を結ぶ
――奈良雅美『そうしてサンパギータは神戸にいる』を訪ねて――

参加報告　酒井順子

2026 年 3 月 23 日、神戸市長田町の「たかとりコミュニティセンター」と「ナドゥリミュージアム」を訪問する JOHA 企画フィールドワークに参加した。ここでは、昨年の「猪飼野を歩く」（2025 年 9 月 12 日）に続く関西での街歩きの経験を報告したい。神奈川県に住む私は、関西を訪ねることはほとんどなく、まして神戸長田町や猪飼野のような在日コリアンの方々が多く暮らす地域を歩いた経験はなかった。また阪神淡路大震災にも実感がなかった。震災当時、私は日本におらず、現地の新聞で街が燃え上がる写真を見ただけで、その出来事を「遠くから眺めていた」。私は専門研究者でもなかった。それでも昨年猪飼野の街で感じたフェールドワークの「生き生きとした魅力」が心に残り、再び関西のフィールドワークに参加したのである。

13 時、JR 鷹取駅改札口に集合し、企画者の安岡健一さんの案内で地域を歩いた。途中の公園には震災の被害を伝えるモニュメントがあり、地域が受けた傷跡が可視化されていた。約２０分歩いただろうか、カトリックたかとり教会とコミュニティセンターに到着した。白い塀に囲まれた教会と中庭を挟んだコミュニティセンターは、伝統的な教会よりもモダンな外観だった。1927 年に創建された教会は戦争を潜り抜け、戦後は保育園として使われた。1980 年にはベトナムからの難民が集い、多文化共生の場となった。しかし協会は 1995 年の阪神淡路大震災で焼失し、後に再建されて現在の建物となった。中庭には 1993 年にベトナムの人々が寄贈したキリスト像があり、震災での焼失を免れたことから「多文化共生の象徴」として語られていた。

教会と隣り合うコミュニティセンターは震災復興の重要な拠点となり、今では市民団体が共同で集う場となっている。奈良雅美さんが参加する「アジア女性自立プロジェクト（AWEP）」もその一つである。奈良さんは 2004 年からこの活動に参加している。

続いて学習室で奈良さんとフィリピン人女性ジーンさんの話を聞いた。奈良さんの本で取り上げている女性たちは支援対象の女性ではないと言われた。本の出版目的は在日フィリピン女性のエンターテイナー的なステレオタイプを壊すことであり、刊行までには時間がかかった。まず読んでもらうことが重要だという出版現場のリアルが示唆されていた。

ジーンさんは、日本人男性との結婚、離婚を決心するまでの葛藤、そして語ることで息子さんとの理解が深まったことを丁寧に話してくださった。深い語りを聞きながら、私は「経験していない過去を想像する」というオーラル・ヒストリーの力を感じた。

続いて長田町のナドゥリミュージアムを訪れた。長田町は在日コリアンの方が多く住む地域であり、靴の生産地として知られている。ミュージアムは一見普通の住宅のようで、一階には家族写真、戦後の教育闘争、靴産業の展示が並んでいた。写真は長年かけて集められたもので、家族の幸せや生活の息づかいが立ち上がっていた。運営者の金 信鏞（キム シニョン）さんは山口県に生まれ、仕事の機会を求めた両親と共に長田町に移り住んだ。大学まで進学したが差別に遭遇した経験を語ってくださった。その後、在日の子どもたちに韓国語を教え、地域の歴史を可視化するためにこのミュージアムを建設した。二階には

数千冊の本が並び、地域の図書館の役割も果たしている。

私にとって最も印象的だったのは、入り口近くの日本地図に「尾道」の文字があったことである。私の故郷、尾道は全国的に知られるような港ではない。にもかかわらず、在日の人々が上陸した港として記されていた。その瞬間、私は小学校時代のクラスメートを思い出した。駅の桟橋近くの海に柱を立て、板を渡して作られた住宅に住んでいた子だ。10 軒ほどあったその家々は港の整備で撤去され、彼女はどこかへ越していった。私は彼女の名前を今も正確に覚えている。彼女は今どこにいるのだろうか。当時の私は、彼女の家族がなぜ尾道に来て住んでいたのかを考えることもなくぼんやりとした子ども時代を過ごしていた。

金 信鏞さんも私とほぼ同年代である。彼の人生も私と同じ時代を生きている。私はただ想像することしかできない。そして、私が現在住む街には大きな基地があり、その建設には在日の方々が働いたという短い記述が残るだけで、その後どう生きたのかを私たちは知らない。ミュージアムは、私が「在日の歴史を知らない」と言い切っていたにもかかわらず、実は私の人生にもその方々との出会いがあったことを目が覚めるように再認識させてくれた。在日コリアンの歴史を学び直してまた訪ねたいと思うばかりだった。

方法論に関して、標準的オーラル・ヒストリーと市民による実践の広がりについて触れたい。 私がイギリスで学んだオーラル・ヒストリーは、複数のライフストーリーを収集し、分析・解釈し、歴史叙述に位置づけるという方法論であり、語りを資料として扱う際の基盤となる枠組みである。

しかし今回のフィールドワークでは、語りが言葉になるまでの時間、語り手と聞き手の関係性、そして語りが生まれるコミュニティの文脈が、重要であることを実感させてくれた。奈良さんの聞き書きは、2004 年から続く支援活動という長い蓄積の上に成り立っており、市民が地域で聞き書きを行う際には、誠実さや信頼関係の構築が不可欠であることが示されていた。語りは単に収集されるのではなく、コミュニティの中でゆっくりと言葉になっていく。その過程自体がオーラル・ヒストリーの重要な構成要素である。

また、ナドゥリミュージアムの展示は、非言語的な表象が語りの一部を形成し、訪問者の記憶を呼び起こし、経験していない過去を想像する契機となることを示していた。語りを言語に限定しない広がりは、今日のオーラル・ヒストリーの特徴でもある。加えて、市民が地域で聞き書きを行う際には、地域に入る難しさや、自分が何者として語り手と向き合うのかという問いが常に伴う。私自身も地元で聞き書きをする中で壁に当たることが多く、そのたびに自分の立場性を再考させられてきた。今回のフィールドワークは、語り手と聞き手の誠実さが相互に作用しながら語りが生成されるという、市民によるオーラル・ヒストリーの核心を改めて理解する機会となった。

こうしたことから、オーラル・ヒストリーは標準的な方法論を基盤としつつも、語りが生まれる場、関係性、非言語的表象、そして他者の過去を想像する力を含む広いコミュニケーションへと拡張されていることを強く感じた。この広がりは、今後の実践において重要な示唆を与えるものであろう。

最後に、今回のフィールドワークで語ってくださったジーンさんと金 信鏞さん、企画者の方々に深く感謝している。そして、歩くのが遅くなった私の歩調に合わせてくださった若い学会員の方の優しさにも感謝している。優しさのあふれるフィールドワークだった。

Ⅳ．お知らせ

1.　2026 年度（2026 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日）会費納入のお願い

平素は学会運営へのご協力、まことにありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願いいたします。

会費のご納入につきましては、9 月末日までにお願いしたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになり、事務局の作業負担の増大につながります。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

また、一部ですが、2025 年度・2024 年度分についても未納の会員がいらっしゃいます。こちらも早めの入金をよろしくお願いいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨を会計にご連絡ください。（どの会員からの振り込みなのか確認できないケースが相次いでいます。ご注意ください。）

■年会費
一般会員：6000 円　学生・その他会員：3000 円
＊「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以下の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に振込票にその旨明記してください。（住所・所属の変更、退会の申し出などの連絡は、振込票ではなく事務局にメールでお願いいたします。）
＊年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先
口座名：日本オーラル・ヒストリー学会
口座番号：00150-6-353335
＊払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。
＊従来と記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報
銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900
店名：〇一九（ゼロイチキュウ）
店番：019
預金種目：当座
口座番号：0353335
カナ氏名（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便振込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必

要に応じて個別に領収書も発行させていただきますので、その際はご連絡ください。

その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の高田（mtakada(at)komazawa-u.ac.jp）までお問い合わせください。

（会計　高田雅士）

2. 会員異動（2026年2月1日～2026年 8月20日）

新入会員（入会順）

1. 村尾尚哉・京都精華大学メディア表現学部・音楽学、日本現代史、メディア論
2. 江口恭平・立教大学大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程・地域社会学、福祉社会学、更生保護、保護司、支援
3. 吉田暁生・武庫川女子大学社会情報学部・芦屋市の打出の小槌伝説、インドナガランド州コヒマ周辺の村々に伝わるインパール作戦での日本軍の振る舞い
4. 金汝卿・北九州市立大学・エスニシティ、ジェンダー、地域研究、質的研究
5. 児玉恵美・日本学術振興会特別研究員PD・レバノンにおける戦争をめぐる個人的記憶
6. 宮田悠史・ZEN大学コンテンツ産業史アーカイブセンター・コンテンツ産業の発展に関与された方々のオーラル・ヒストリー
7. 横谷奈歩・九州大学芸術工学研究院・現代美術制作、第二次世界大戦の記憶、記憶・歴史の残し方
8. 片沼宗琉・早稲田大学社会科学研究科地球社会論専攻・履物屋、小売業、生活史、写真、アーカイブ
9. ファンデルドゥース瑠璃・広島大学平和センター・世代間トラウマ・長期的トラウマとオーラルヒストリーの関係
10. 武井克真・社会福祉法人伊勢崎市愛のはぐるま会・在日外国人の生活史やコミュニティ史、障害者やその家族の生活史、社会事業史
11. 杤山瑠南・一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程・ジェンダー史、朝鮮近現代史
12. 木下佳人・熊本大学大学院社会文化科学教育部博士後期課程・社会学、在日コリアン研究・アイデンティティ研究、差別論・マイクロアグレッション
13. 松永康・無所属・図書館におけるオーラルヒストリーの保存、生成AIによるオーラルヒストリーの聞き取り、生成AIを用いたオーラルヒストリーとの対話
14. 横川剛毅・和泉短期大学児童福祉学科・ソーシャルワーカーの口述筆記
15. 板谷めぐみ・京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程・原爆被爆者の語り
16. 永井翔・椙山女学園大学看護学部・虐待サバイバーに関する研究
17. 髙井裕二・大阪歯科大学医療保健学部・高齢者福祉と教育文化の接点におけるオーラル・ヒストリー
18. 横山哲士・北海道大学大学院国際広報メディア観光学院国際広報メディア研究コース・ジェンダー、ライフストーリー、男性学
19. 吉本淳一・和歌山大学大学院観光学研究科博士後期課程・オーラルヒストリーと伝統話芸・講談との関係

20. 青谷実知代・和歌山大学観光学研究科博士後期課程・観光開発における理論展開の研究
21. パトエワ・アリウナ・モンゴル語教室ノタック・プリヤートのオーラル・ヒストリー、ハイラル・シネヘンの地域史、多民族社会史、女性史、教育史
22. 斎藤あおい・東京都立大学子ども・若者貧困研究センター・ジェンダー、リプロダクション、子育て、ライフヒストリーの分析方法
23. 前田直宏・東京都立大学大学院人間健康科学研究科博士後期課程・オーラル・ヒストリー、研究方法論、研究倫理
24. 番匠健一・社会理論・動態研究所・南米移民史、社会運動としてのフォークミュージック
25. 殿木久美子・東京大学公共政策大学院学術専門職員・オーラルヒストリー、政策形成過程、科学技術・高等教育政策、研究支援（URA)、研究アーカイブ

退会者
長田律子、小黒純、佐野直子、大木紗英子、山岸蒼太、冨永佐登美、内野海平

※連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は事務局までご連絡ください。（事務局長　佐々木てる）

・・

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

JOHAニューズレター第42号
2026年 8月 20日
訂正版 9月9日
編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局
〒030-0196
青森県青森市大字合子沢字山崎 153 番地 4 青森公立大学
日本オーラル・ヒストリー学会事務局 佐々木てる宛
日本オーラル・ヒストリー学会事務局
E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp
＊郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊